

設計	株式会社 小松隼人建築設計事務所		
施工	キリン木材株式会社		
竣工日	2018年3月12日		

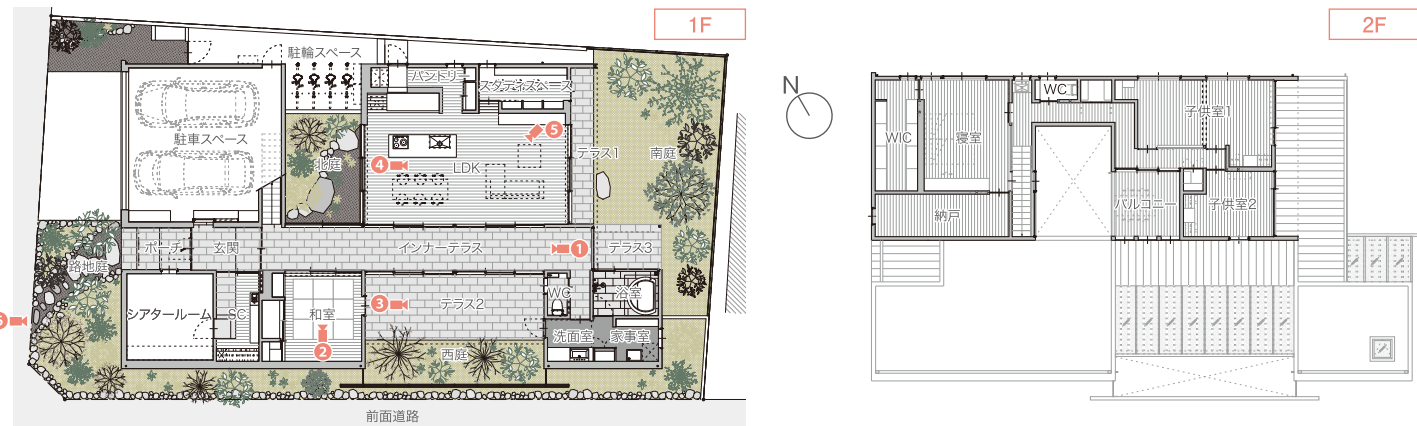
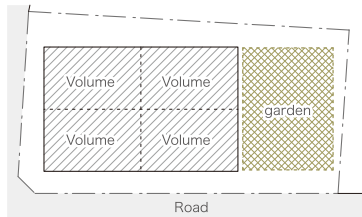
◎建物概要

建設地	山口県岩国市	延床面積	256.06㎡
敷地面積	390.02㎡	構造・規模	木造2階建

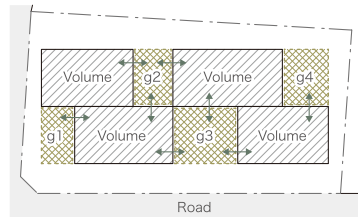
◎設備面の特記

厨房機器	ガスコンロ		
給湯機器	ガス給湯器		
冷暖房機器	エアコン	床暖房（ヒートポンプ式）	

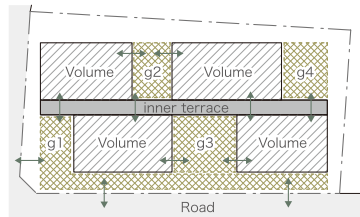
平面図

4つの
庭

敷地にゆとりがあるため南側に大きく庭をつくることも考えられるが、諸室と庭との関わりに偏りができる。



4つの棟に分け、4つの棟それぞれに特徴ある4つの庭を配置。棟と庭が市松状に連続する空間が生まれた。



廊下を南北に通すことで、4つの棟それぞれが4つの庭と密接な関係をもつ。さらに庭にゆとりをもたすことで、季節によって景色を変えるインナーテラスを生み出した。

設計コンセプト

山口県岩国市の中心部に位置する閑静な住宅地。敷地西側は多くの参拝客が訪れる神社が建ち、遠景に望む山並みも美しいため、この方位に建物を開放したい。その一方で、様々な視線の交錯があること、さらに西からの強い日差しに配慮する必要があった。建主の「緑を眺めながら開放的に生活したい」という要望も併せて、周辺環境と建築の多様なつながりを計画。

敷地の大きさから判断すると南側に大きく庭をつくることも考えられるが、諸室と庭との関わりに偏りができるため、まず採光、通風、周辺建物といった条件を考慮しながら建物を4つの棟に分けた。併行して4つの棟に「隣地との距離をとったゆとりある南庭」「塀に守られた西庭」「間接光を取り込み、通風を促す北庭」「道路に開かれた路地庭」といった特徴ある4つの庭を

棟とのつながりを考慮しながら配置。結果として棟と庭が市松状に連続していき、様々な視線から庭とのつながりが生まれた。さらに棟と庭をつなぐ廊下を南北に通すことで、日常の移動が4つの庭との密接な関係を持ち、幅にゆとりを与えることで外部テラスとひと続きとなる使われ方や、家具を配置して居室の延長として使われるといった、様々な行為を生み出すインナーテラスとしての役割を果たしている。道路に開かれた路地庭を西側接道面まで広げることにより、個の庭であることを超えて、周辺環境へ開かれた庭としてコミュニティを誘発している。建物の建った余白に庭をつくるのではなく、建物と庭を等価に扱いながら計画したことが、この住宅の豊かさにつながったと考える。

審査委員講評

角地に建つこの住宅の庭は、2面の道路に沿ってL字型に広がり、個の空間というよりも、周辺環境に開かれたコミュニティ空間となっているところが素晴らしいと思います。住宅のボリュームを機能ごとに分割し、それぞれが個性的に内部化された庭と一体化した空間となっており、自然環境に連続する実ののびのびとした住空間が完成しています。



⑤居室ごとに空調をコントロールできるよう、ガラス框引き戸をインナーテラスとの境界に配置。またインナーテラスは、冬季は外部と内部の中間領域となる風除室として、夏季は引き戸を開放することで居室に風を通す土間空間のような機能を持たせている。
⑥北道路に面する路地庭は西道路までL字に広げることで、個の住宅の庭であることを超えて周辺環境へ開かれた庭となる。

可児 公一・植 美雪

建築設計事務所 可児公一植美雪

【作品名】

YUKISHIMO-K

設 計	建築設計事務所 可児公一植美雪
施 工	梶岡建設株式会社
竣 工 日	2016年8月31日

◎建物概要

建 設 地	岡山県津山市	延 床 面 積	115.55㎡
敷 地 面 積	914.30㎡	構 造・規 模	木造平屋建

◎設備面の特記

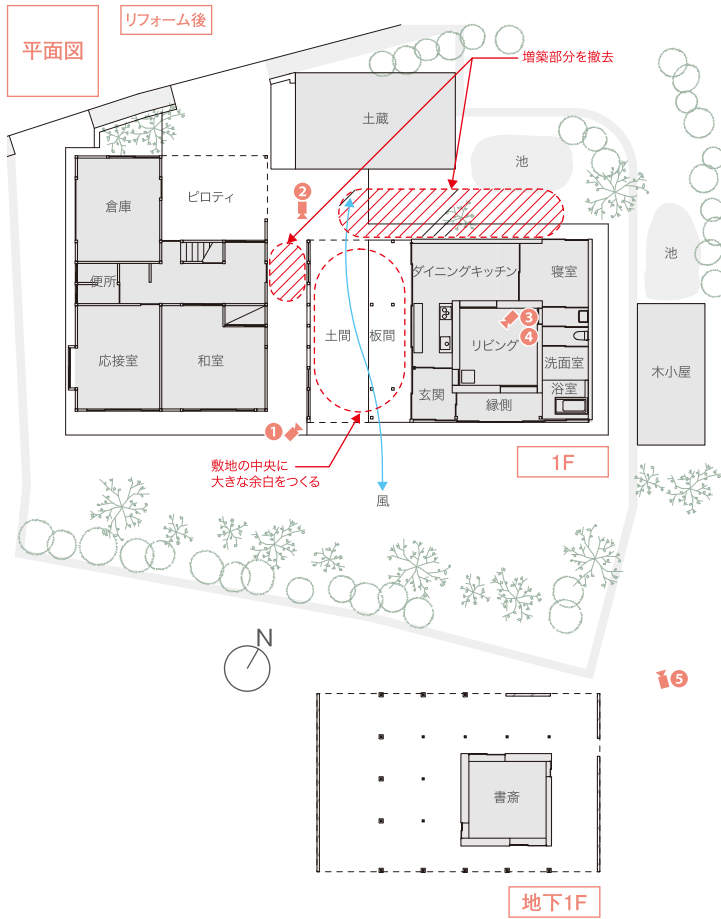
厨 房 機 器	ガスコンロ	
給 湯 機 器	エコジョーズ	
冷暖房機器	エアコン	床暖房(電気ヒーター式)



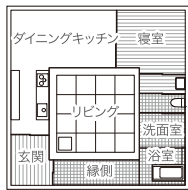
before



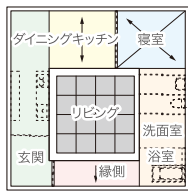
after



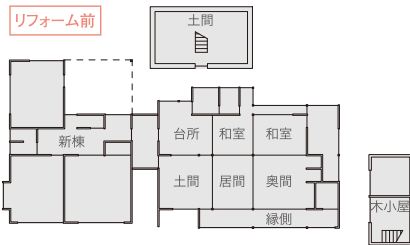
床の仕上げと天井形状が、部屋の単位を超えて、それぞれ独立して続く。



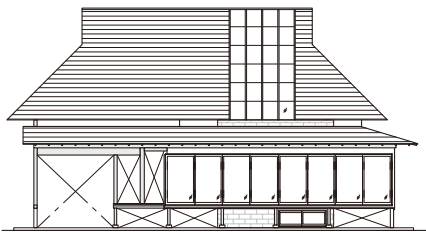
床仕上げ図



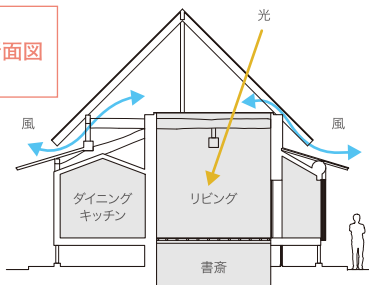
天井伏図



立面図



断面図



①②既存の枠組みは残し、大屋根の下に新たな土間と板間を設けた。土間と板間による外部空間は、敷地内には新たな風の流れを生み出す。普段は、農作業や立ち話の空間として、孫たちが帰省したときにはキッチンを大きく開きバーベキューをするなど、昔と今をつなぐ空間になっている。



③④内部で唯一既存の梁が見られるリビング。ガラス天井とし、ガラス屋根からの光をそのまま取り入れることで、冬季の空調にかかるエネルギーを削減。また、日差しの強い夏季はオーニングを引き、ガラス屋根とオーニングの間にこもった熱気を換気扇で外部へ排気。省エネルギー性を実現している。

設計コンセプト

岡山の山間部、築120年を超える古民家の改修計画。施主は60代の夫婦で、大きくて古いこの家を持て余していた。母屋はこの地域に多く残る茅葺き屋根にトタンを被せて生き永らえてきた。敷地内にはこの母屋の他に30年前に建てられた住宅、土蔵、木小屋と呼ばれる倉庫が建っており、広い敷地にもかかわらずとても窮屈な状態であった。改修するにあたり、窮屈な敷地に余白を取り戻すことが必要だと考え、同時に今の時代に先人の遺したこの家を改修する意味を考えた。現状、この家は時代や家族の変化に伴い増改築が繰り返され新築当時の潔さは無く、ぶよぶよと余計なものがまわりついているように思えた。過去の新築当時の姿に似せて、綺麗に取り

繕っていくのではまた同じく余計なものがつき、根本的な解決にはならない。そこで私達は、長い年月をかけてまわりついたものを取り払い、新築当時の軸組まで戻す事とした。120年前からそこにあったこの家は、もはや敷地の環境そのものであり、その環境の中に、今必要とされているボリュームを置いていく。また、古民家らしさや木造らしさととらわれ、細かく全体を統合していくのではなく、この強大なコンテクストの中においては、天井、壁、床が、それぞれの正しさを自分勝手に主張したとしても、ひとつの統一性が生まれるのではないかと考えた。古民家の廉価版ではなく、この場所そのものが今にふさわしい姿になる事をめざした。

審査委員講評

古民家を軸組だけ残し、その状態を敷地条件としてスタートした建築。広い土間板間を残し、屋根の一部をガラスとして、口の字型の光に満ちた住空間を軸組の中に入れ込んだ住宅。改修や改装といった文字通りの概念ではなく、歴史を環境として把え直した意欲的な作品です。

⑤茅葺き屋根は、防災上も維持の面でも、個人で維持管理し続けるのは難しいため、金属屋根としたが、地域との調和を考え、建物外形は既存のカタチを残した。リフォームにあたり、ガラスやアルミサッシ、タイルやフレキシブルボードなど、新しい材料を多く使用したが、古民家のもつ形の力と、岡山の山間部に残る銀色トタンの屋根色を踏襲したことで地域との調和を図った。



原 浩二

原浩二建築設計事務所

【作品名】

ステップハウス

設 計	原浩二建築設計事務所
施 工	八光建設株式会社
竣 工 日	2018年6月18日

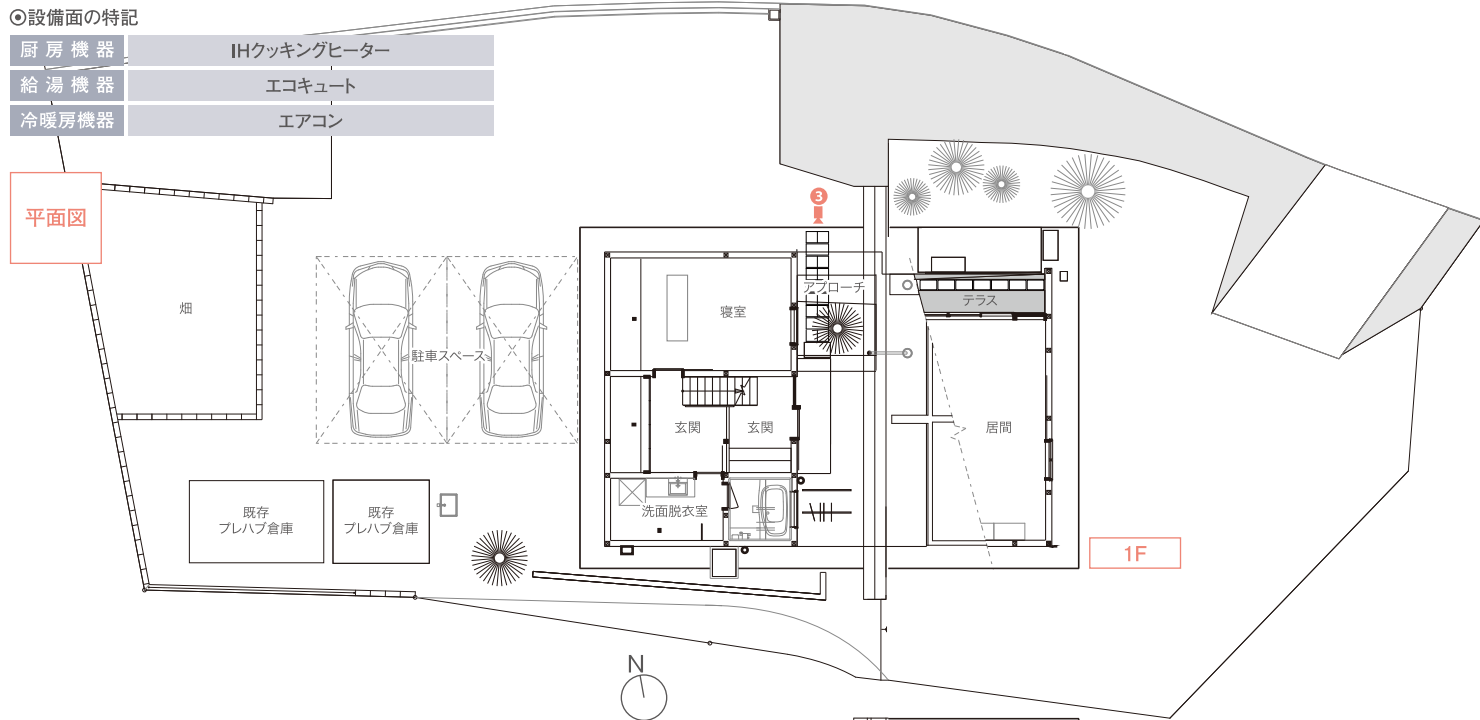
◎建物概要

建 設 地	島根県松江市	延 床 面 積	123.52㎡
敷 地 面 積	610.33㎡	構 造・規 模	木造2階建

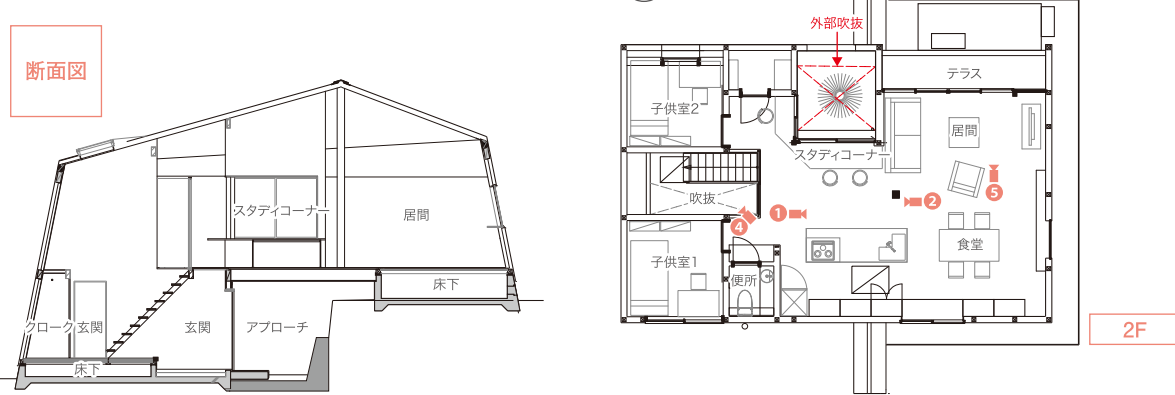
◎設備面の特記

厨 房 機 器	IHクッキングヒーター
給 湯 機 器	エコキュート
冷暖房機器	エアコン

平面図



断面図



設計コンセプト

敷地は市街地からはずれた自然豊かな山すそにあり、敷地内に2mほどの段差がある。そこに、あたかも「岩がめり込んでいる様な」形態を考え、斜めに傾いた壁や、変形方形の屋根によって、他にはないような特徴的なボリュームをつくりだした。敷地段差をまたぐようにしてできた「トンネル」が玄関へのアプローチになっており、玄関ホールは1～2階の吹抜空間となっている。1階には寝室と水まわりを配しているが、この寝室と玄関からは外部の2m段差のコンクリート擁壁と、その上の土斜面（現在はリビアを植え込んである）を感じることができる。2階にはLDKと子ども室をレイアウトしているが、リビングからは北側へぬける景色と、地面との接地の両方を楽しむことができ、この敷地の特徴を最大限に生かしている。キッチン前には“外部

吹抜”をつくり、敷地の段差や光・植栽を内部空間にとり込むことを考えた。北向きのプランのため、採光は階段吹抜とキッチンの上部にそれぞれLow-eペアの熟線カットトップライトを設けたが、適度な光量と北窓からの間接光がむしろ落ちついた内部空間をつくりだすことになった。今回の敷地は自然に囲まれた環境であったが、その自然は、優しい自然ではなくむしろ力強いものに感じられた。その力強さに負けることのない存在感を建築でつくりだしたいと考え、地元で先鋭的な美容院を経営するオーナーの感覚にも応えるものになった。

審査委員講評

敷地内に2mの段差。いわゆる変形敷地をいかに活かすか、を見事に具現化した作品です。敷地段差から生まれた玄関トンネル、モルタルの壁、構造材現しの天井など洞窟に迷い込んだような感覚を覚えるアドベンチャーランド。工事中に施主さまご夫婦に第一子が誕生したそうで、彼もしくは彼女を、この遊び心いっぱいの子育てハウスが包み込むことでしょう。



1



2

①②2階LDK部分は壁をモルタル塗り、天井を屋根構造材の現しとして素材感を出し、広々とした室内空間をつくりだしている。



3



4



5

③敷地段差と建物ボリュームの間にできた“トンネル”。雨の多い山陰で軒下をつくっている。木製ルーバーの奥は洗濯物干場（南の太陽光が当たる）。
④モルタル壁にスポットライトからの光が落ちる。1～2階の階高は2200mm。
⑤静かな環境でゆっくりと暮らしたいという要望に対して、敷地の高低差を利用し北側へぬける景色をつくった。

前田 圭介
UID

【作品名】
町×apartment

設 計	UID
施 工	株式会社 沖田
竣 工 日	2017年12月15日

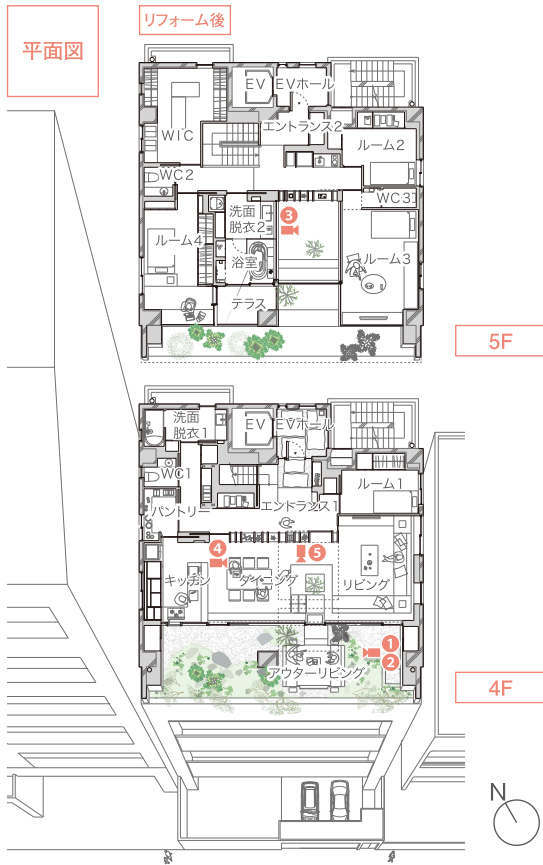
◎建物概要

建 設 地	広島県広島市	延 床 面 積	212.28㎡
敷 地 面 積	467.42㎡	構 造・規 模	鉄筋コンクリート造

◎設備面の特記

厨 房 機 器	ガスコンロ	
給 湯 機 器	エコジョーズ	
冷暖房機器	エアコン	床暖房(ヒートポンプ式)

平面図

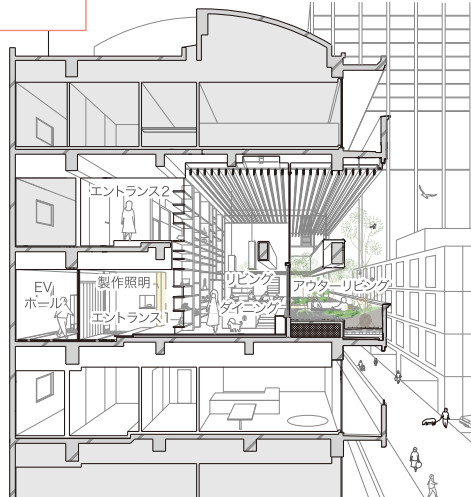


before

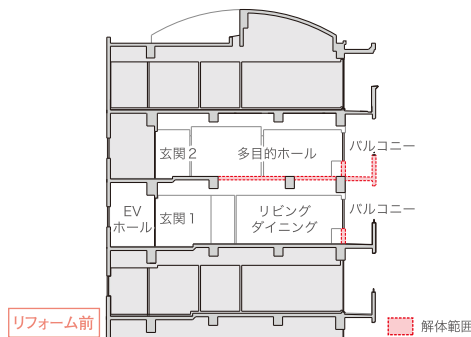


after

断面図



リフォーム後



リフォーム前

設計コンセプト

都市部に建つ築20年ほどの高層共同住宅の2層に渡る改修である。一般的なマンションは、階高やテラスなど同じ形式を垂直方向へ効率的に積層するため、画一的で単調な表層になりがちだ。また上層階へ行くほど地上と近い離した生活は住まいの機能だけを満たし、豊かな自然の庭(=大地)を感じる環境とはかけ離れた状況にある。

今回、建主所有の高層共同住宅の4、5階部分を改修するにあたり、日々多忙な建主夫婦から求められた要望は「家で過ごす時間をゆったりとできる居場所」であった。子どもたちも成人したことから自分たちの時間を優先し、不要な部屋を減築することで適度な床面積と自然溢れる大地が感じられる空間を考えた。

具体的にはまず、サッシがあった内外境界面を取り払い、外部の庭面積を拡張。そして5階のバルコニーはもちろんのこと、不要な床スラブの減築によって縦方向への開放性をつくり、残された十字のフレーム構造をビル全体の新たなファサードデザインとして

取り込んだ。これにより高木の配植が可能となり、空中に浮かぶ庭越しに陽光が内部空間へ降り注ぐ。枝葉のゆらぎの陰影を感じさせる、今までにない、確かな大地を感じることができる自然環境が生まれた。

近年のマンションのリノベーションは、間仕切りを取り払い横方向へ拡張したり、仕上げを剥ぎ取りラスティックな器とするものが多い。そのような中、上下階を繋ぐ立体的な設計とマンションという高層階のビルディングタイプにおいてもランドスケープデザインを諦めないこの解法は、ビル所有者との対話の中でこそ生まれる。現在、供給過多・需要減少する高層共同住宅において、新たな価値を持ち合わせたストック再生のケーススタディになればと思う。アーバンスケープを感じられる浮遊した住まいと庭、都市との関係性をこの新たな大地によって創出した。

審査委員講評

市街地の中心部に、これほどに緑の多い住まいが可能になっていることに驚きました。2層にまたがるボリュームを減築し、バルコニーの奥行きを広くして生まれた庭。その庭とともに、木質系を多用した素晴らしい住空間を生成しています。これからのライフスタイルに対応させたリノベーションの、新たなケーススタディとなる見事な提案です。



①②木漏れ日を浴びてくつろげるアウターリビング。奥行き約1.5mという一般的な細長い既存バルコニーは、内外の境界となっていた壁を取り払い、約3.4mに拡張した庭とすることで都市でも自然に包まれる感覚が得られる。庭のソファやテーブルは収納機能を有し、住み手の様々なシーンに応じた使い方ができる。



③④⑤減築によって庭や垂直方向への抜けをつくりだし、高木の配植が可能となったうえ、テラスや吹き抜けから降り注ぐ自然光が奥の空間まで明るく照らす。夏場は上階の軒と植栽によって直射光を和らげ、冬場は床暖房を使用した石材の蓄熱効果によって、年間を通して快適な住空間をめざした。棚は空調システムや製作照明などの設備機器を組み込んでいる。



春日 琢磨

春日琢磨建築設計事務所

【作品名】

薬師ヶ丘の家

設計 春日琢磨建築設計事務所

施工 有限会社ALF

竣工日 2016年7月20日

◎建物概要

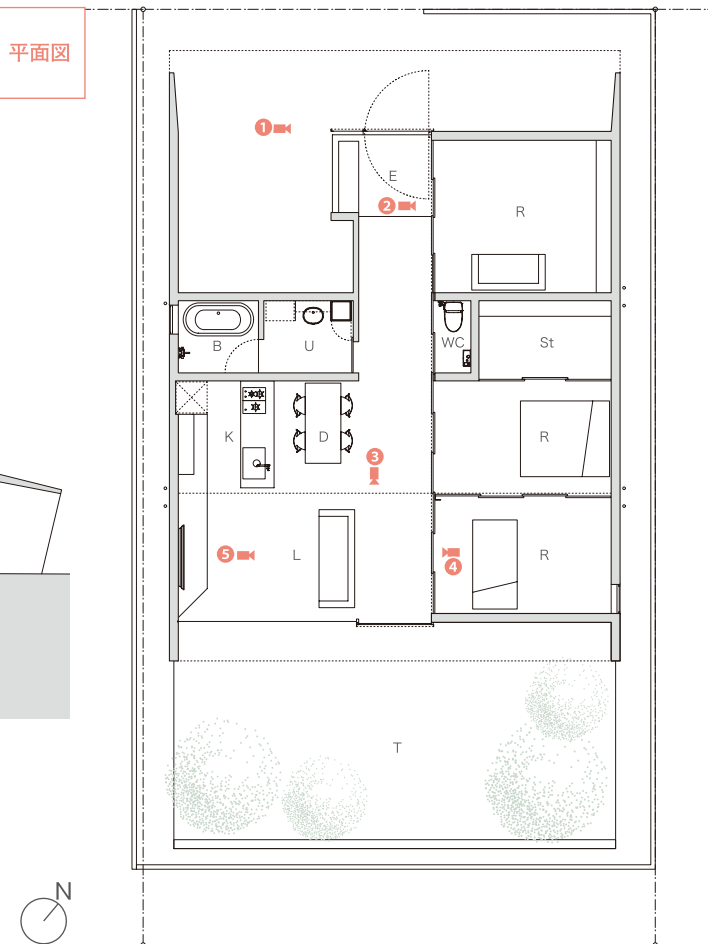
建設地	広島県広島市	延床面積	92.34㎡
敷地面積	241.51㎡	構造・規模	RC造

◎設備面の特記

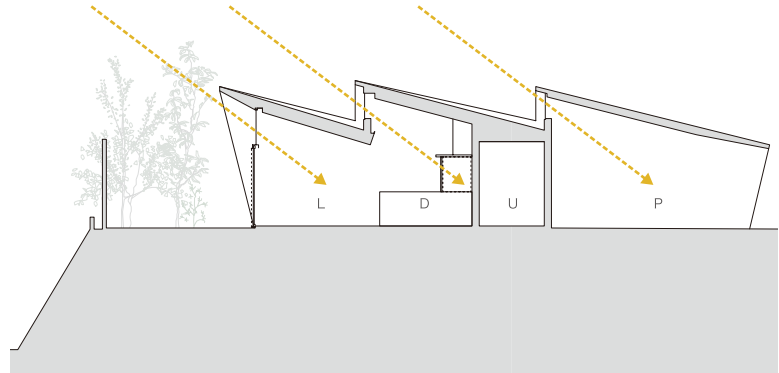
厨房機器	ガスコンロ		
給湯機器	ガス給湯器		
冷暖房機器	エアコン	床暖房	



平面図



断面図



設計コンセプト

夫婦と子ども+愛犬のための専用住宅である。敷地は市内を見下ろす高台の団地にあるが、眺望が望める敷地ではなく周囲は団地特有の画一的な2階建ての街並みが続いていた。多趣味のご主人からは「バイクいじりのできるガレージと趣味の部屋」、奥様からは「留守の間も愛犬が伸び伸びと暮らせる住まい」を依頼された。そこで、平屋建てとすることで内外部を一体とした暮らしができないかと考えた。全体の構成を南側から主空間、浴室や収納などの従空間、北側の趣味の空間にゾーニング。それぞれの空間を串刺しにするように玄関から庭までの動線空間を配置した。また各空間にそれぞれ屋根スラブを斜めに架けることにより、北側の趣味空間への採光を確保している。斜めの屋根スラブは空間に抑揚をもたらし、南面では外部空間への誘いを促し、北面ではプライバシーを確保するとともに建物を超え青空へと視線を誘う。素材に関しては、愛犬や子ども達がつける傷なども想い出になるように、触れる箇所に関してはコンクリートと鉄とガラスと木に限定し、

経年変化や施主の趣味でもあるセルフリペアを楽しめるよう配慮した。また、室内の床仕上げを温水床暖房埋め込みのモルタルに、さらにガレージや庭も同じモルタル仕上げとすることで、庭や道路までを含めたグランドレベルでの親和性を高め、内外部のヒエラルキーを超えた暮らしを誘発する。外部につながる玄関とリビングの開口部は、エキスパンドメタルにSUSメッシュを貼り付けた引き戸を設け、スチールサッシとの2重サッシとし防犯性を確保しつつ開け放すことができる。留守中も安心して愛犬のために扉を開放し、風通しの良い状態を維持できる。2階建ての住居が建ち並ぶ街並みに、軒を可能な限り低くした平屋建てを配置することによる青空の拡張は、わずか一層分であるにも関わらず、それ以上の開放感を与えられたのではないかと感じている。

審査委員講評

南に庭をとり、屋根を折り板状として、どの部屋にも光を呼び込んだ広いワンルームのような平屋建ての住宅。構造(屋根)と空間(断面)と生活(ゾーニング)が熟慮された計画。ワンルームなのに変化に富み、いくつものスペースがありながら一続きのスペースとなっています。床仕上げが内外モルタルで連続させてあり、敷地全体がのびのびとした生活の場となっています。



1



2

1 2 道路に面してワイドに広がるガレージ及びエントランス。エントランス横には、バイクいじりのできるガレージと、趣味の部屋を設けた。



3



4

3 上部ランマによる重力換気を利用し、エアコンによる空調管理に加え自然換気を積極的に導入。留守中の愛犬の生活環境向を図ると共に、省エネ・省CO₂にも有効。
4 季節や時刻により刻々と変化する日差しと風を感じることができる、上部ランマ。自然をより身近に感じながら快適な暮らしができるように配慮。
5 斜めの屋根スラブによって、北側の趣味空間への採光を確保。南面では外部空間への誘いを促し、北面ではプライバシーを確保。愛犬との暮らし、趣味の暮らし、普段の暮らし。それぞれの暮らしがバランスよく調和する住まいが実現した。



5

塚本 雅久

塚本雅久建築設計事務所

【作品名】

38×38のフレーム

設計 塚本雅久建築設計事務所

施工 塚本雅久

竣工日 2018年8月22日

◎建物概要

建設地	岡山県笠岡市	延床面積	214.66㎡
敷地面積	201.68㎡	構造・規模	木造2階建

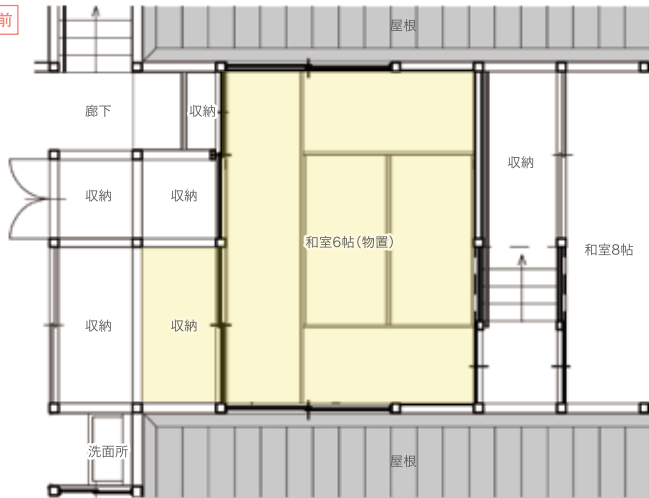
◎設備面の特記

厨房機器	IHクッキングヒーター(既存設備)
給湯機器	電気温水器(既存設備)
冷暖房機器	エアコン

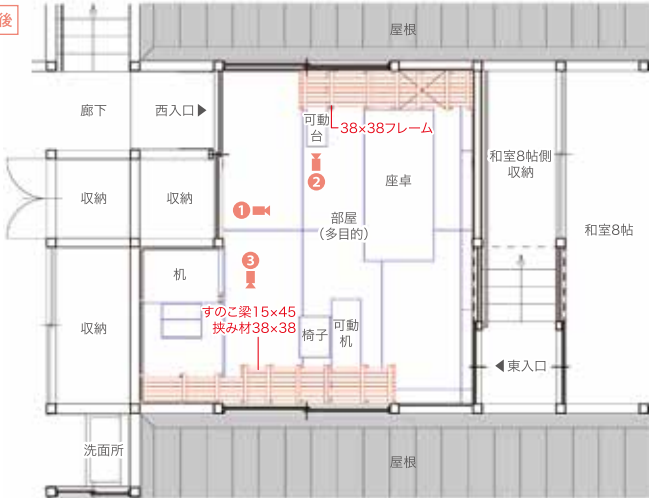
平面図



リフォーム前



リフォーム後



設計コンセプト

仕事を通じて、2階の多くの部屋が物置となっているのを見てきた。その事例を有効利用する計画を自邸でプロトタイプとして行った。停滞しているスペースの利用価値を上げ、構造補強とともに物置であった用途にも対応するため、収納を重視し用途の変化にも柔軟に対応していく計画とした。居室のみの狭い範囲を工事するので、DIYでも可能な施工性を重視。38×38の木材を主材とし、全てホームセンターで購入できるものを選定しており、工事は全て設計者一人がしている。「38×38のフレーム」を挿入し「すのこ状梁」「竿縁挟み梁」「可動家具」で構成した。38×38の木材を主材と15×45の木材、合板を使い木ビスで接合している。軽い材料は運搬、切断も容易である。断面が小さいため始めは頼りないが、工事が進むにつれ材の数が増えるごとにテンションが上がり強靱となる。棚で構成された空間と

なり、収納は可動家具の机、椅子、座卓、踏台と絡み合い空間のレベル差を構成している。さらに既存天井を撤去し、風の対流を促し開放感のある空間とした。電化住宅であるので、エアコンを設置、LED照明を採用している。既存材料との関係性も重視し、大梁は強く主張するデザインではなく、格子のフィルターにぼんやり浮かんでいるようなイメージとした。天井部もフレーム構成の要素であり平面的な剛性を確保し、照明に照らされると前面道路からの立面を構成する。綿壁も撤去する事なく、その上に塗装する試みをしている。現時点では多目的に利用する部屋となり、遊具ともなっている。将来的には、子どもの部屋となる予定であり38×38のフレームが柔軟に対応する。

審査委員講評

「建築家の志とは」。その答えが、自邸でプロトタイプとした新たな実験として結実しました。建物内にある物置などを有効利用する手軽なリフォームの提案は、ホームセンターで購入できる38×38の木材を使ったDIY。最初のクライアントである家族の遠慮のない反応を糧に、さらなるバージョンアップを期待しましょう。



before

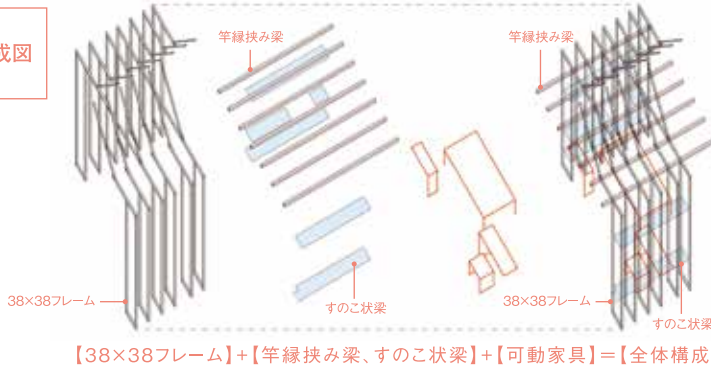


after



①②③可動家具を38×38のフレームに接続し構成している。机、椅子、座卓、台(踏台)はレベルが違うので空間の構成にもなり、可動するため、収納可能である。すのこ梁のフラットな面が必要な時は、板を渡し大物に対応し、柔軟に変化する。

構成図



可動家具の設置時



可動家具の収納時



すのこ状梁



すのこ状梁・合板設置

審査委員
特別賞

島根県

原 浩二

原浩二建築設計事務所

【作品名】

“普通の家”の普通なリフォーム



設 計	原浩二建築設計事務所
施 工	有限会社アイケー住宅
竣 工 日	2017年12月22日

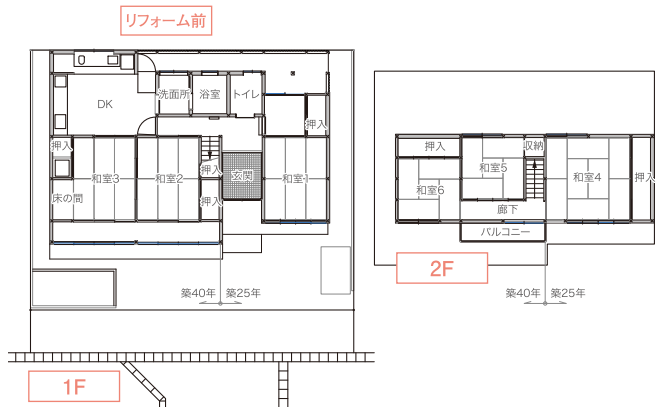
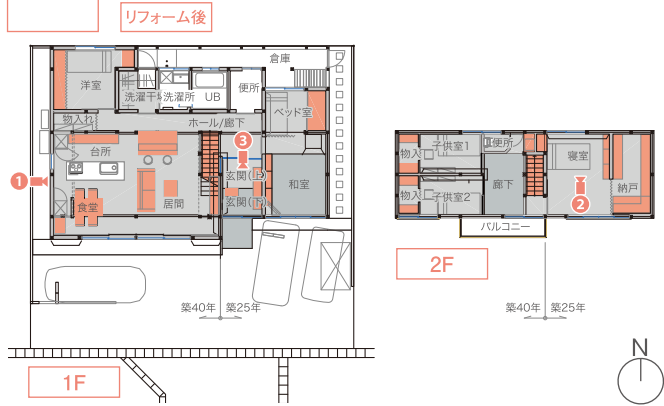
◎建物概要

建 設 地	島根県出雲市	延 床 面 積	143.59㎡
敷 地 面 積	183.74㎡	構 造・規 模	木造2階建

◎設備面の特記

厨 房 機 器	IHクッキングヒーター
給 湯 機 器	エコキュート
冷暖房機器	エアコン

平面図



❶❷既存のものをなるべく無駄にしないよう杉座板や畳表、障子を意匠的に再利用した。既存壁は真壁のまま見せ、新規壁を大壁として新しさと古さを同居。壁の一部に既存の畳表を再利用している。



❸玄関を広くするために、既存のポーチ部分を半分だけ室内にし、軒天をそのまま現している。

設計コンセプト

約40年前に建てられた住宅で、25年前に一度増築された住宅のリフォーム。ご夫婦と子ども2人に、ご主人のお父さんと妹さんの家族6人のための計画で、最初に現地調査をしたときの印象は、かなり物が多くて「生活感満載」という感じであった。ご夫婦以外はデザインや建築にはまったく関心がないようだったので、今の生活を整理しなおして“普通”にまた次の30～40年を住み継いでいってもらいたいと考えた。まず家本体の耐久性アップのために傷んだ土台、大引まわりの入れかえ、防湿コンクリートの打設、耐力壁の増設等を行った。

省エネに対しては、既存のアルミサッシはガラスのみペアガラスに入れ替え、床はフェノバードt45mm、壁はグラスウールの24kg×t100mm、天井はグラスウール10kg×t100mmの2重敷きとし「断熱等性能等級4」程度のグレードを確保。意匠的には雑多な生活感を受けとめるように、シンプルではなく色々な素材を使うように心掛けた。例えばLDKは天井を落として梁と座板を見せ、個室の天井にはパルプボードに竿縁天井風に杉の押縁を付けた。解体のときに既存の材料もできるだけ積極的に使うことを考え、畳下の杉の座板を階段横の大壁一面に貼ったり、

畳表を壁に貼ったり、既存階段の段板は削りなおしてそのまま再利用した。また、障子も裏面に白いポリ化粧板を貼って玄関の大きな下足箱の引戸に使用。物が床に散乱しないよう、壁面棚をたくさん造りつけ収納は可能な限り多くつくった。けっして“建築的な”リフォームではなかったと思うが、少しでも楽しそうで、良い意味で生活感のある場がつくれたような気がする。

審査委員講評

新旧の建築材をバランスよく利用・使用した見事なリフォーム、設計者の力量を十分に感じます。収納も多く設け、光に満ちた新しいライフスタイルが楽しそうです。

審査委員
特別賞

岡山県

岸本 泰三

岸本泰三建築設計室

【作品名】

下高倉の家（二期改修）



設 計	岸本泰三建築設計室
施 工	有限会社クラフトハウス
竣 工 日	2017年3月30日

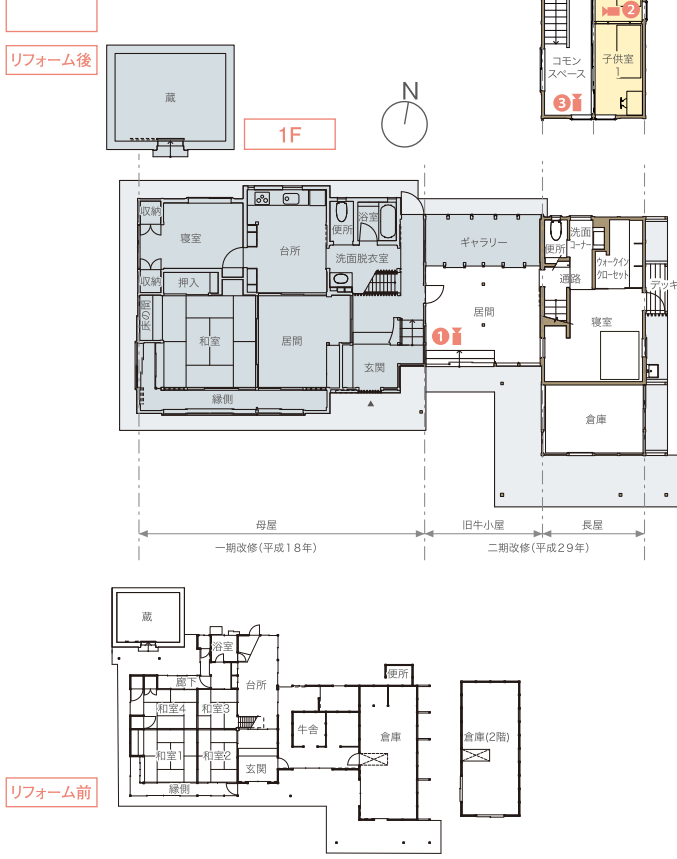
◎建物概要

建 設 地	岡山県津山市	延 床 面 積	253.41㎡
敷 地 面 積	618.42㎡	構 造・規 模	木造2階建

◎設備面の特記

厨 房 機 器	IHクッキングヒーター
給 湯 機 器	電気温水器
冷暖房機器	エアコン

平面図



リフォーム前



❶12年前に母屋と長屋をつなぐデッキとして改修された部分(旧牛小屋)は今回の改修では完全に室内化され、居間として三世代をつなぐ中心的な役割を果たすことになる。
❷壁・天井・床の断熱には、吹付断熱工法を採用し、断熱効果を図っている。採光の問題は新しく設けたトップライトによって解決している。



❸長屋の2階は、3人の男の子の極小の個室と共有部分に分かれる。簡易な間仕切りで仕切ることによって子どもたちの独立等、将来的な使い方の変化にも対応できる。それぞれの個室も完全に仕切るものではなく、間仕切り上部を開放することで、広がりや家族の気配を感じることができる空間になっている。空調設備も1台のエアコンでまかなう。

設計コンセプト

ご夫婦が育ち盛りの男の子3人を連れて、母親と同居するための改修計画である。この住まいは、12年前にも当設計室が改修のお手伝いをさせていただいた。1期改修では構造的には建物全体を持ち上げ、基礎工事と土台を補強している。長屋の改修に加えて、母屋を主な生活空間とし、母屋と長屋をつなぐ旧牛小屋をコレクションの備前焼ギャラリーとデッキにする提案であった。今回の希望は、長屋部分だけを改造して夫婦の寝室と子ども室をつくることであったが、12年前に半戸外デッキに改修した旧牛小屋部分は、今回の改修で完全に室内

化し、家族共用の居間として、親、子、孫、三世代をつなぐ中心的な役割を果たすこととなった。物置だった長屋の2階は、3人の子どもの極小の個室と commonspace に二分割した。子どもたちは自分の個室の扉を開放して、commonspace と合わせて遊びに来た友達の居場所をつくることになる。間仕切りは合板1枚で仕切ってあり、将来の家族構成の変化への対応も視野に入れた計画である。各室間も完全に仕切るのはなく、間仕切り上部を開放し、広がりや家族の気配を感じる空間になっている。また充分な断熱と基本的に

ワンルームの計画で、1台のエアコンで2階全体の空調をまかなうことを可能にしている。今回の改修工事は、この住宅にとっては2期改修工事ということになる。1期改修工事の施主であるご主人が幼少期から過ごした住まいを、子や孫の世代にも引き継ぎたいという思いが実現した。ライフスタイルの変化に対応しながら、計四世代が住み継いでいく住まいになった。

審査委員講評

2度のリフォームを重ね、四世代が住み継いでいることに驚きます。現在のライフスタイルに合わせた合板類による家具や建具、そして既存の壁板、床板の再利用、さらに昔から受け継いだ見事な柱梁とのバランスが見事です。

審査委員
特別賞

広島県

穂垣 友康・穂垣 貴子

くらし設計室

【作品名】

三つ庭の家

設 計	くらし設計室
施 工	ホーム株式会社
竣 工 日	2017年2月23日

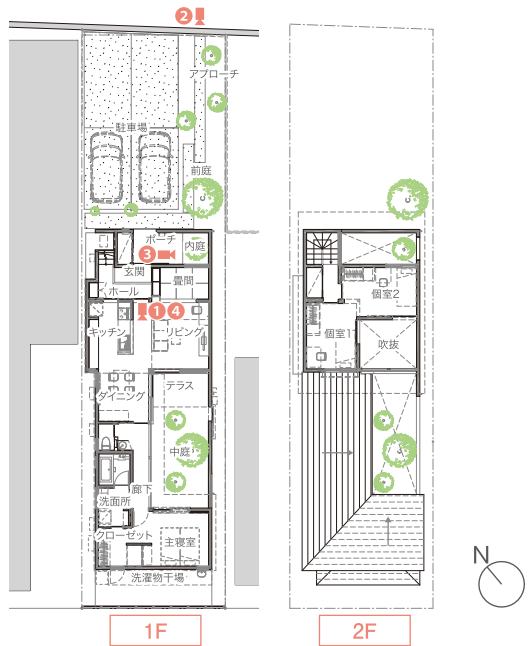
◎建物概要

建 設 地	広島県福山市	延 床 面 積	110.61㎡
敷 地 面 積	224.75㎡	構 造・規 模	木造2階建

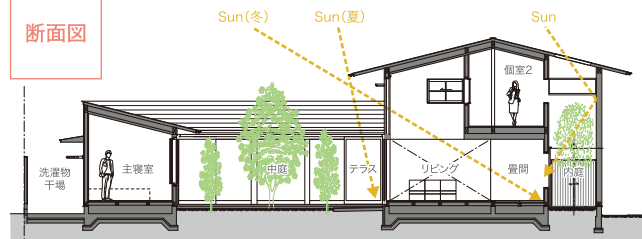
◎設備面の特記

厨 房 機 器	IHクッキングヒーター
給 湯 機 器	エコキュート
冷暖房機器	エアコン 床暖房(ヒートポンプ式)

平面図



断面図



①中庭を中心にコの字型にリビング、キッチン、ダイニング、廊下、主寝室が配置されている。



②道路からエントランスまでのアプローチは前庭とし、四季折々の花木が出迎える。



③自然と一体化した暮らしをめざし、内庭も設けた。上部の天窗と東の開口部から光が差し込む。



④東側の袖壁と1階分の高さの壁が自由な開口をつくる防火壁となる。中庭とつながる木製サッシの窓まわりにより、採光を確保し、眺望も生み出している。

設計コンセプト

広島県福山市の緑豊かな公園が集まる中心部。ビルや住宅が混在する市街地であり、前面道路は車や人の通りが絶えない。周囲には古い建物や空地があるため、将来的な周辺の変化に左右されず、プライバシーを守りながら豊かに暮らすことができる普遍的な場所をめざした。周辺状況が変化しても採光通風を確保できる中庭をつくり、全ての部屋を中庭に対してコの字型で開く「中庭を中心に広がる暮らし」を提案した。中庭の自然と一体となり、広がりを感じながら暮らすために大切なのは窓まわりのデザインである。この敷地は

準防火地域にあるため、敷地東側に防火壁を設けることで延焼ラインを避けた中庭をつくり、庭を中心に広がる自由な「木製サッシ」の開口部を実現した。リビングの吹抜空間に設けた大窓は中庭とつながり、冬は太陽の光を奥の部屋まで取り込む役割を果たす。大窓の熱損失低減のため、遮蔽には「断熱ロールスクリーン」という形式をとった。ロールスクリーンの左右の隙間からの窓温度の侵入を防ぐため、柱にガイドレールを取り付け、その溝の中を布が通る納まりとすることで左右の隙間を無くしている。これによりガラスとロールスクリーン

の間に空気層をつくり断熱性を確保した。この家には、中庭以外に暮らしを豊かにする2つの庭がある。玄関ポーチと一体化した内庭は、畳間からの緑の景色をつくり、中庭から内庭への風の流れを生みだしている。もう1つの庭は道行く人にも心地よいと感じてもらえる街へとつながる前庭である。仕事や学校、買物から帰宅した家族を、四季をめぐる前庭の緑や草花が出迎えてくれる…そんな生活の風景が豊かだと考える。

審査委員講評

南北に細長い敷地にさらに奥行きを感じさせる住宅。生活の様々なシーンを想定して、1/100レベルの計画から1/1のディテールまで細やかに対応された完成度の高い作品です。

審査委員
特別賞

山口県

土居 郁夫

土居建築工房

【作品名】

フラミンゴハウス

設 計	土居建築工房
施 工	季美の住まい株式会社
竣 工 日	2018年7月27日

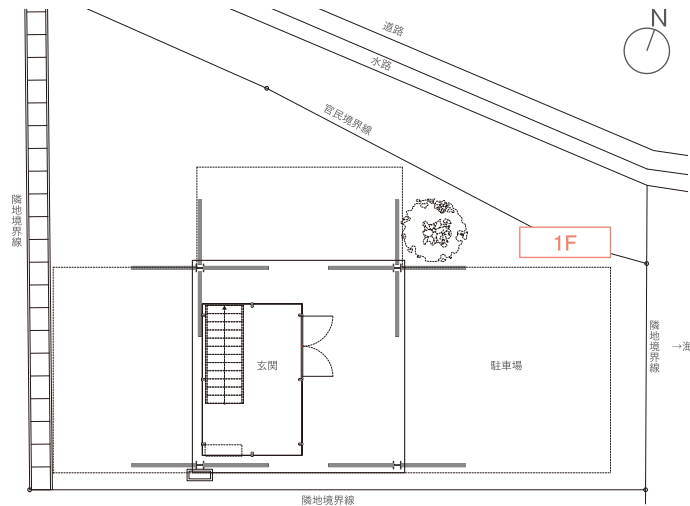
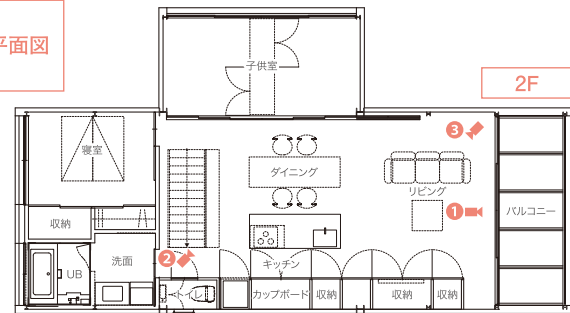
◎建物概要

建 設 地	山口県岩国市	延 床 面 積	133.56㎡
敷 地 面 積	155.14㎡	構 造・規 模	鉄骨造

◎設備面の特記

厨 房 機 器	IHクッキングヒーター
給 湯 機 器	エコキュート
冷暖房機器	エアコン

平面図



③「インテリアはできるだけ物が見えないようにしたい」との要望に対し、冷蔵庫、家電機器、エアコン等は建具によって隠れるようにした。

リビングにすることを前提に計画を考えた。その解答として、2階のワンフロアに必要な部屋すべてを配置。1階は駐車2台分のスペースで敷地の間口が狭いこと、西面は積ブロック擁壁で高さ2.7m、その上のにり面が2.7mほどの高さがあり、崖崩れの対応策として柱のない突き出したピロティ方式の構造を考えた。1階はエントランスホール of 部屋のみとし、ガラス張りとした。2階はバランスを考慮した3方突き出た建築で、宙に浮いたイメージ「フラミンゴハウス」の建築になった。2階のT型の間取りの開口先は海と道路側に向かい、

2方向の開口を1室として解放とするため将来的に子ども室は6枚の引込戸で仕切るようにした。外観は1階にH鋼の柱と、鉄パイプ直径101.6mmの筋違いの鋼材(シルバー)で固めたピロティ、2階はガルバリウム鋼板(シルバー)とレインパクトのあるメカニカルなイメージを表現した。

審査委員講評

宙に浮いた大胆な構成の住まい。敷地条件に対応してつくられており、プライバシーを気にすることなく景色の中に浮遊感をもち、オープンでのびのびとした生活が送れそうです。

岡野 元哉
島根大学

【作品名】
パブリック壁を持つ家

全体図



マチ交流の核になる。

平面図



イメージ図 & 断面図

1. 球体壁の家	球体で構成される。球体独特の登る力が求められ、他の壁とは違う楽しさを味わうことができる。	2. 多面壁の家	多くの面で構成される。多面のため変化に富み、多くのムーブ（動き）が要求される。	3. バルジ壁の家	壁の角度が変化しているので難しく面白い壁である。筋力・バランス力が求められ、総合力が試される。	4. ルーフ壁の家	180度近く逆さになる。天井壁、トンネル壁とも呼ばれ、重力に逆らう感覚が味わえる。ある程度の保持力と体幹が必要。
5. 薄被り壁の家	傾き100～110度。疲れずに多くのムーブ（動き）ができるため、初心者から上級者まで幅広く楽しめる。	6. どっかぶり壁の家	傾き130度以上。強傾斜になるためある程度の保持力と体幹が必要になる。中・上級者向け。	7. 垂壁の家	傾き90度。多くの基本となる壁で初心者でも登りやすく、練習壁として登られる。	8. スラブ壁の家	傾き90度以下。下半身を主に使うため、腕力がない年配者や初心者でも登りやすい。

設計コンセプト

楽しいとは何か？多くの研究が、豊かな人間関係を築くことが人生の楽しさを創ると証明している。ここでは「楽しい＝豊かな人間関係」と仮定してみた。近年、住宅を都市近隣とつなげるのは良いとされているが理想論になってしまっている。ただ公共性をもった空間を作っても、そこに人が集まらないからだ。縁側や通り土間など、昔ながらの住宅公共スペースがあっても、そこに人が集まり、交流している姿をあまり見ない。それは、そこに現代に合った人と関わる以外の「目的」がないからだ。人は何かの目的があって集まり、そこに付随的に人との交流が生まれる。昔であればモノや情報であったが、現代ではネットで手に入る。そこで現代に合った目的をもつ住宅を提案する。

ではどのような目的があるか？私は、丹下健三が広島を都市のコア（公共性）に設定したひとつの、スポーツに目を向けてみた。中でも、かつては人を遮り拒む象徴であった壁に多くの人が集まり、交流が生まれているボルダリング壁に着目し、パブリック壁を持つ家

を提案する。

ボルダリングは、2020年の東京五輪の新種目としても注目されており、私はあるボルダリングジムを訪れた。そこでは、地域の子どもから会社帰りのサラリーマン、健康のために訪れている老人など、県内外の幅広い層の愛好家が楽しんでいた。ボルダリングという目的のもとに集まり、そこに交流が生まれているのだ。では、このボルダリング壁を用い、目的と交流をもったパブリック壁を住宅に採り入れることはできないだろうか。高さ5mの住宅の外壁に「ホールド」と呼ばれる無数の突起物を作る。ボルダリングの壁種をもとに8種の壁型を形成し、住人はその中から好きな形を選び住み、外壁を他者に開放する。それを集合住宅群とすることで、都市の中心に公共用地を作り出せない日本においての新しい公共性のコアになり、多くの人がそこに集まり豊かな人間関係を形成していくと考える。

審査委員講評

誰でも思いつきそうでなかなか思いつかないアイデアです。公園や路地空間など街にあるパブリック・スペースの有効活用はよく議論されますがまさか「個人住宅の壁」をパブリック・スペースに見立て、人を呼び込むという仕掛けとは。このアイデア、東京オリンピックにまだ間に合います。

形態ダイアグラム

平面計画

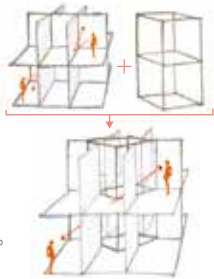
外壁を公共に開放するため、開口部はひとつだけとしてプライバシーを守る。



開口部

断面計画

どこからでも家族を感じることができ、家族愛を育む。天窓は採光もかね、吹抜で自然換気もかねる。



住宅の許容力

どんなときも住もう人に寄り添い、ストレスがたまったときは運動で発散。他人に会いたくないときは開口部を閉め、天窓から覗く大きな空を楽しむ。疲れたときはくぼみで休み、屋根の上で星を眺め、リフレッシュ。



次の使い手・使い方 ～使い手や時代に合わせて様々に変化する～

住居



凸凹、大小、〇〇・・・8種のなかから家族に合った家を選ぶ。

民泊・ホテル



政府主導のインバウンド観光客が増加中。こんなホテルがあったら泊まりたいはず。

店舗



大きな開口部と人が集まることを利用して店舗に活用。

居職



住宅部を開放せずに、住みながら働く。インストラクターや用品レンタルとしてボルダリングサービスを提供する。

ボルダリング壁



誰も使わなくなった家は、ただのボルダリング壁に。新しい空き家の使い方となる。

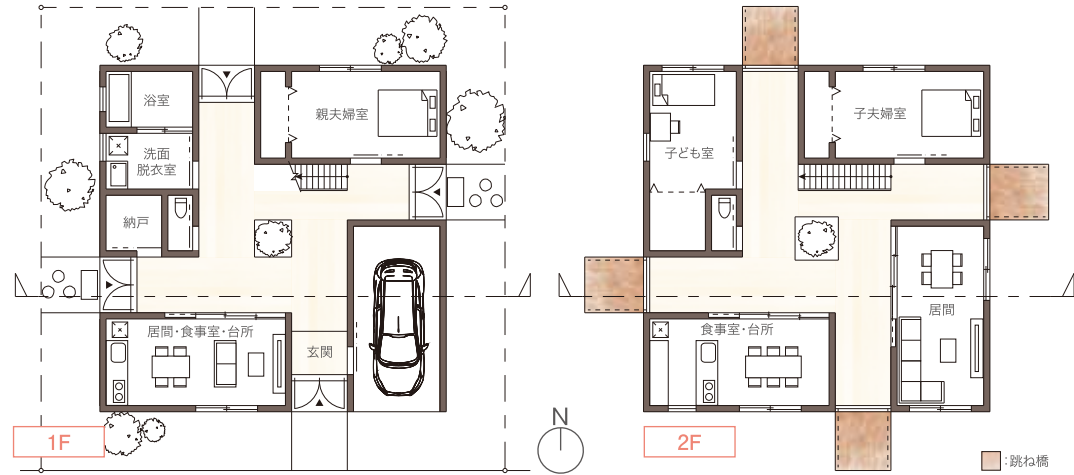
相川 裕一

島根大学

【作品名】

つながりの架け橋

平面図



立面図



ダイア
グラム

【現状】



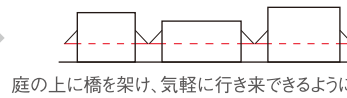
住宅の間には境界があり、住民の交流が制限される。

【第1段階】

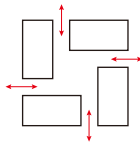


境界を取り払い、共有可能な庭をつくる。

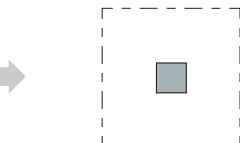
【第2段階】



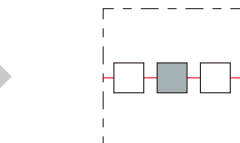
庭の上に橋を架け、気軽に行き来できるようにする。



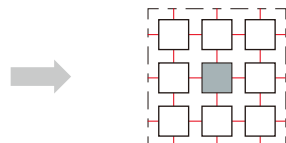
4方向に住宅同士をつなげることができる
平面計画。



計画地にコアとなる住宅を建てる。



まずは隣同士でつながる。住民同士で
密な交流が生まれる。



つながりが広がり続け、交流が深まる。
地域コミュニティが長期に渡り保たれる。

設計コンセプト

プライバシーを重視し、機能性を追及した住宅が広く普及している。住宅は閉ざされた状態となり、人が生活している様子や雰囲気外に伝わることは少ない。近隣住民と関わる機会が減り、人と交流できるコミュニティが不足し始めているように感じる。本来は私生活のなかでも、より多くの人と関わり合うことは大切なことであり、私たちは改めてその重要性を見つめなおす必要があるのではないかと考える。

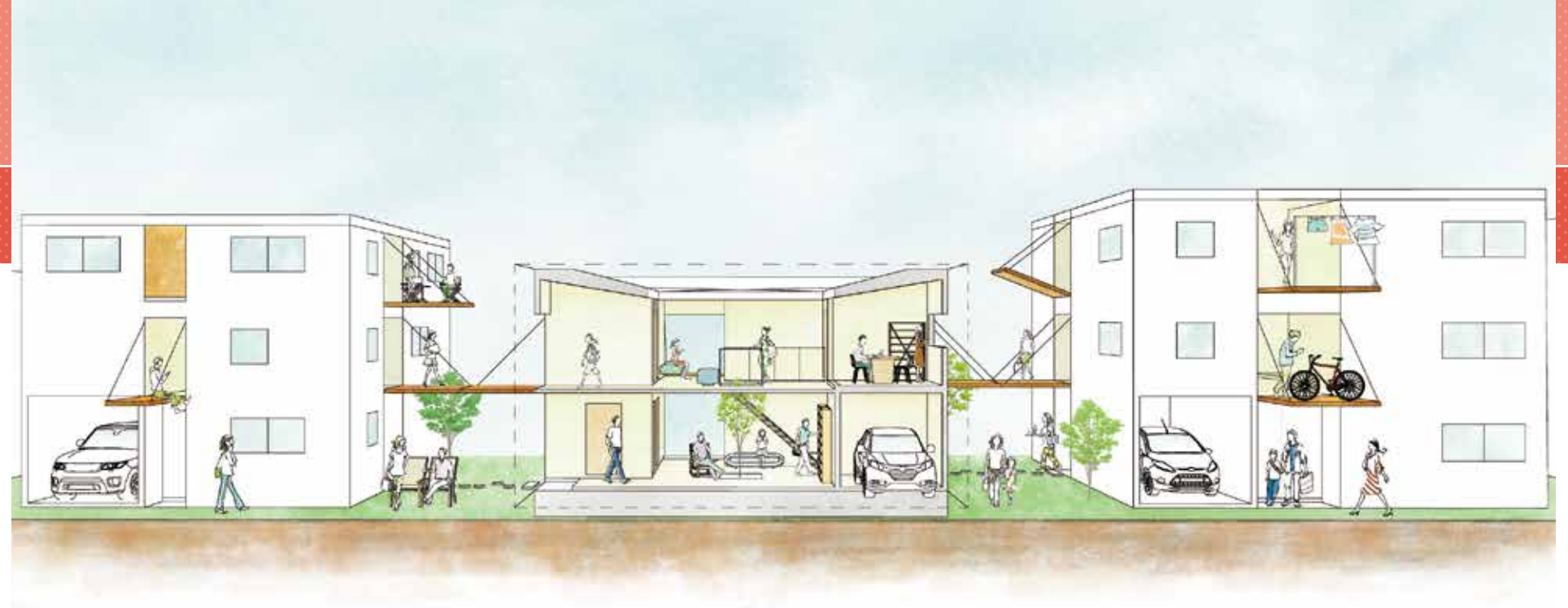
そこで、住民同士の交流を活発なものとするために、住宅同士が手をつなぐように「橋」を架け渡した住まいを提案する。橋を歩く人とすれ違う際にあいさつを交わす、午後のお茶会をともにする、ちょっとしたお出かけや食事会に誘うといった住民同士の

交流が盛んになり、地域全体に賑わいが広がっていく。住民同士で自然と協力し、助け合ったり、支え合ったりする環境が生まれ、毎日が楽しい生活を送ることができる。

そうすることで、少しずつ住宅のつながりが広がっていき、地域のコミュニティが大きなものとなっていく。

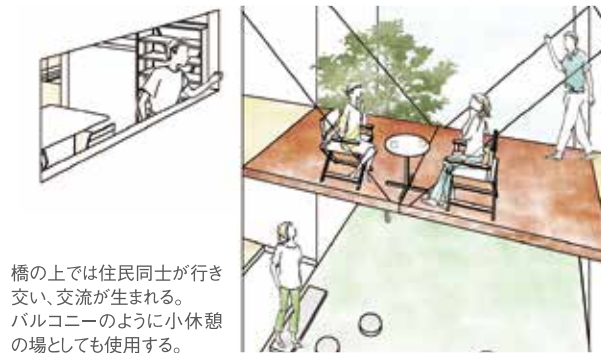
審査委員講評

住民同士の交流が持続可能で楽しい住まいや環境をつくっていくという考えにもとづいた住戸タイプの提案です。1階でのつながりでは不特定多数ですが、2階、3階では特定の交流となり、現実味があります。架け橋がなくても住みやすい住宅となっており、架け橋は閉じることも、バルコニーとして利用することもでき、さらに現実味があり、提案の先の可能性を感じます。



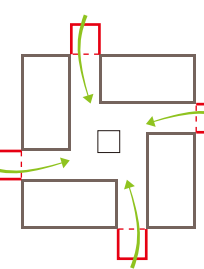
持続可能な
コミュニティの
形成

跳ね橋



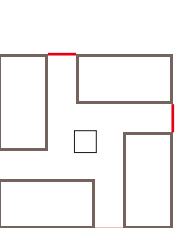
橋の上では住民同士が行き
交い、交流が生まれる。
バルコニーのように小休憩
の場としても使用する。

【昼間】



橋を架け渡すことで、
住民同士が行き交う。

【夜間】



橋を閉じて、家族だけの
空間を作る。

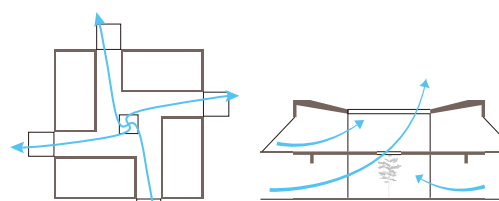


居室の戸を開き、中央のスペースと一体に使う。橋を渡り、居間や食事室で住民同士が気軽に集う。
好きな番組と一緒に見たり、料理教室を開いたりする。地域のみんながひとつの家族のような集団になる。



通風・採光 計画

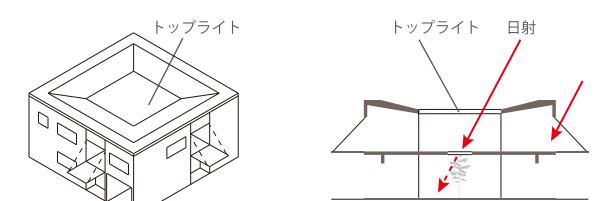
風



橋を架けると、風が十字路
に抜けていく。

下から上へ、風の通り道が
生まれる。

光



口の字型の平面形状とし、
内側から光を採り入れる。

1階:最小限の光が射し込み、落ち着いた空間
2階:光が十分に射し込み、明るく温かい空間

学生
部門

佳作

菊地 琴子

広島女学院大学

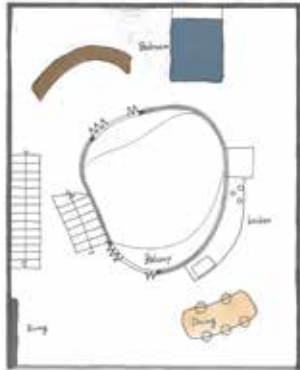
【作品名】

トキと生きる

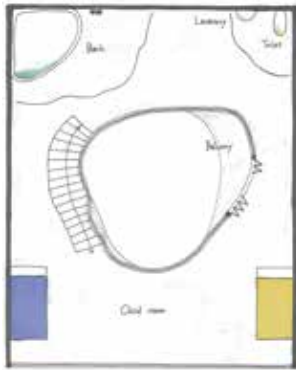
平面図



1F



2F

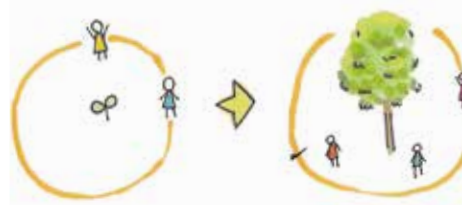


3F

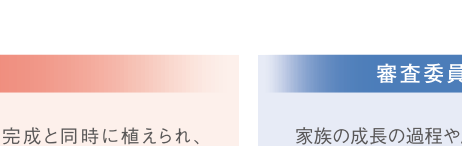
断面図



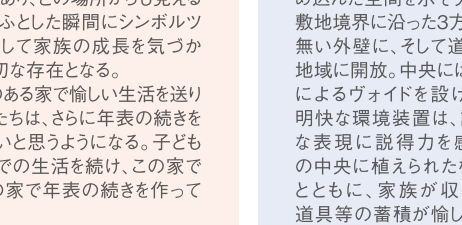
自分の思い出を飾っていく。



シンボルツリーの成長がトキの経過を感じさせる。



自分の思い出を飾っていく。



自分の思い出を飾っていく。

審査委員講評

家族の成長の過程や歴史のつくられかた、そしてその理想像などを詰め込んだ空間を示そうとしています。敷地境界に沿った3方向は開口の無い外壁に、そして道路側のみを地域に開放。中央には自由な曲面によるヴォイドを設け、その単純明快な環境装置は、計画の素朴な表現に説得力を感じます。庭の中央に植えられた樹木の成長とともに、家族が収集した生活道具等の蓄積が愉しそうです。

学生
部門

審査委員特別賞

岡田 直樹

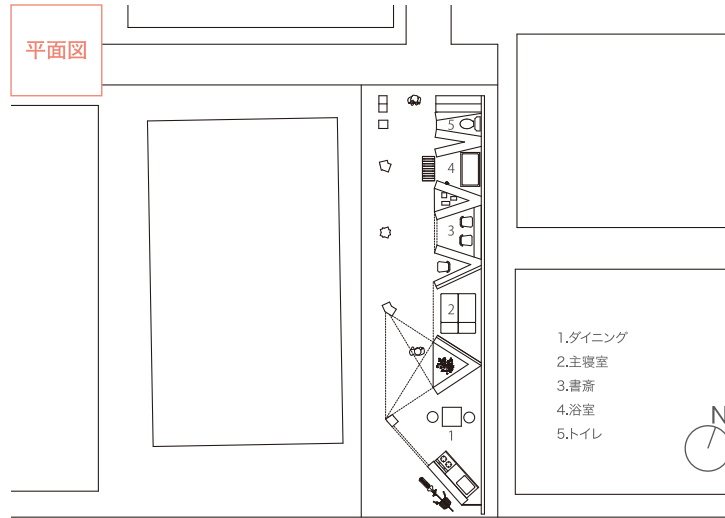
広島工業大学

【作品名】

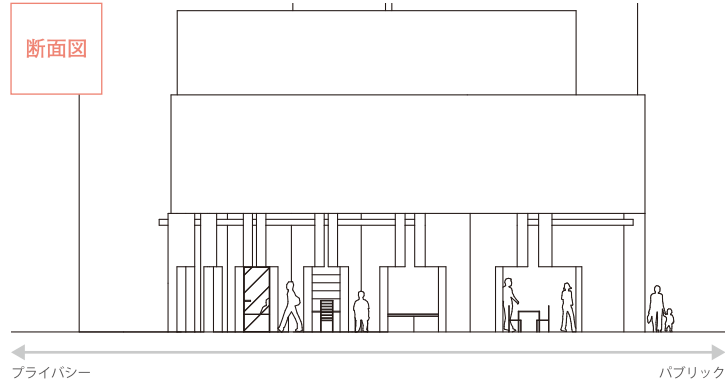
路地の住み家

～フラクタルなボリュームが生む隙間と連続性～

平面図



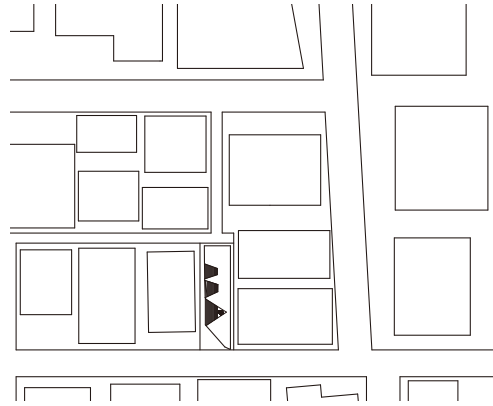
断面図



つながる壁・生まれる隙間

異常なまでの雑多な空間に包まれた環境と北側の小路を活かすために、南側に向けて壁の角度を変えながら開いていく案を提案する。そこに、抜け道を作る。すると大小のフラクタルな空間が繋がりながら、互いに共存しあう空間が生まれた。そこでは都市のカオスと住戸が相まって、路地のようでそうではない不思議な空間を作り出している。

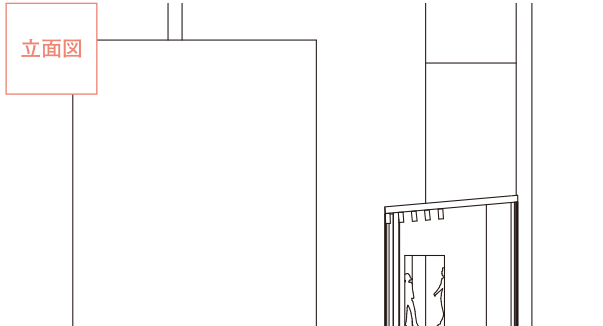
配置図



計画地

敷地は東京都にある道幅4m以下の密集住宅地である。北側には1.5mの小路があり、周辺は詰め込まれたかのように建物が建っている。

立面図



北から南へ向けてパブリックな空間となる。

雑多な風景

都市において路地の中は人の生活であふれており、住むことは何かを考えさせられる場である。



設計コンセプト

都心に住むということのもっとも異常な、そして豊かな質とは何かと考えると、それは、いろいろな“モノ”が集まりごちゃごちゃしていることだと思う。それらは、異なるモノ同士がくっついたり離れたりすることで、異なる風景を作り出し、互いに共存することで、豊かな空間を生み出す。そこには、住戸と住戸のわずかな隙間や路地空間が広がる。路の風景を壊さずに雑多な都市の形式を住空間へ取り込むことで、従来の画一的な注文住宅から脱却し、新しい都市の住空間の原形となるだろう。

敷地は道幅4m以下の密集住宅地とのある路地であり、都市における特徴的な土地で住宅を再構築することを考えた。ここでは、壁を常に角度をつながら南側に向けて開いていく方法を提案する。まるでバネのように伸びた壁たちは、角度がめちゃくちゃになっている。すると、その隙間に、路とも庭とも部屋とも区別のつかない新しい質の空間が生まれる。それらは抑揚のある路であり、住戸と外部との視線をコントロールし、独特な奥行をもった風景を作り出す。この壁が作り出す風景こそが都市の姿であり、

多様性に富んでいることを示している。それらの雑多さが豊かな空間となるだろう。この独特の平面系によって作り出された空間たちは、それぞれに異なる性質をもちながら、南北へ抜ける路でつながる。そこに一体感が生まれ、お互いに共存しながらのびのびとした楽しい住まいを獲得している。これらの要素が互いに共存することで外部と内部の新しい関係や住まい方を根本的に変える。都心の新しい住まい方として改めて提案したい。

審査委員講評

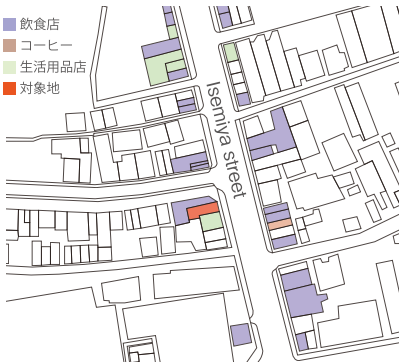
コンクリートで武装した21世紀の路地空間が作り出す風景とは、きっと「下町情緒あふれる」という表現では説明できないものになるでしょう。建物に沿って並んだ鉢植えのわきをネコがのんびり散歩する図は想像できません。

玉井 双喜

島根大学

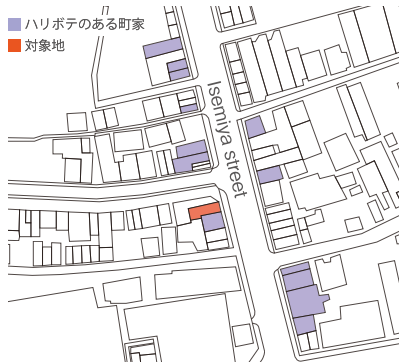
【作品名】
ミセのイエ
～街開きの収納～

伊勢宮町のこと



伊勢宮町での住まい方を考えると、周りに飲食店があるので大きいキッチンが暮らしの上で必要ではなく、街の特徴である「商い」と関係する住まい方が必要である。

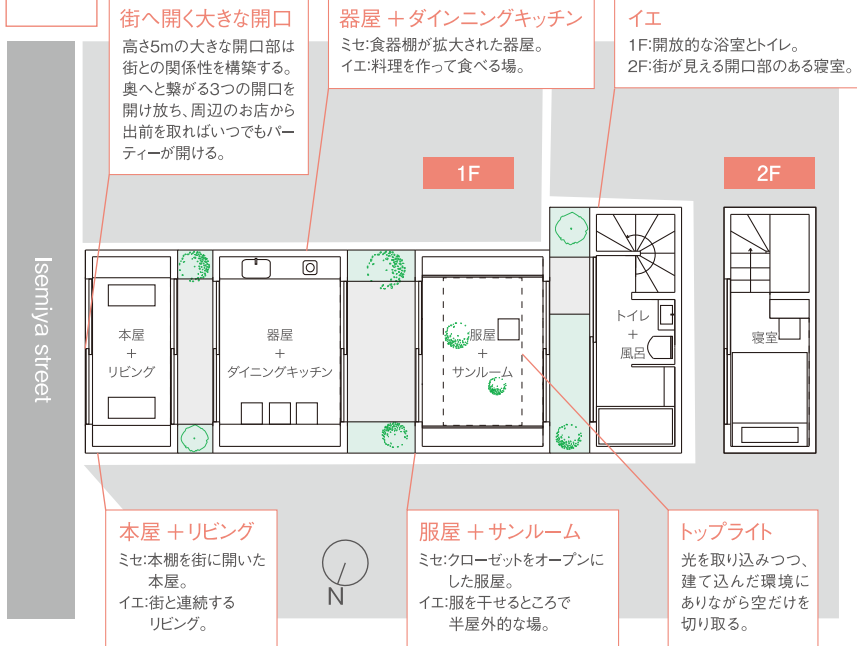
街の建物のこと



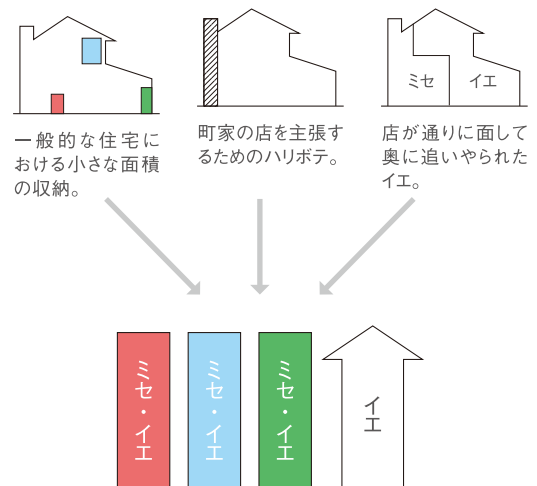
対象地に隣接する敷地の建物にもハリボテとイエがあり、もう片方は飲食店となっている。伊勢宮町の平均的な敷地である。



平面図



ダイアグラム



収納の拡大とハリボテの延長、分割の操作を行うことでミセとイエが一体となり、分割されたボリュームの隙間から明るさを取り入れることが可能となったイエ。

設計コンセプト

私たちは普段、家に住むと同時に街に住んでいる。しかし、私たちは街に暮らせているのだろうか。そこで、私は、街で暮らすための収納を街へ開き、暮らしながら商うイエを提案する。
松江市の伊勢宮町に位置する店舗併用住宅である。敷地の間口が狭く、奥に長い町家の形状であり、左右に隣接する建物ボリュームは6mほどある。この敷地に対して持続可能で楽しい住まいを実現するため伊勢宮町をリサーチしていく。
伊勢宮町の周囲には飲食店が多数あり、

またそれらのお店が仕入れる鮮魚店なども立ち並ぶ商店街である。一方で、夜になると仕事帰りのサラリーマンで賑わう歓楽街でもある。また商店街という形式の伊勢宮町では店の入れ替わりがよくあり、その都度、店が更新された痕跡が残っている状態である。平入りを隠す四角いハリボテ状のファサードも痕跡のひとつで、街のひとつの特徴にもなっている。ハリボテ(店部分)の背後には住まいがあり、通りに面していないかつ周辺が立て込んだ環境のため太陽の光もあまり入らない住環境である。

街の痕跡として潜在している「ハリボテ」と街の特徴である「商い」との関係性を持たせるため、一般的な住宅における小さな面積の収納を拡大し、ミセとして街に開き楽しい住まいを創造する。また、ハリボテの延長、分割の操作を行うことでミセとイエが一体となる。加えて分割されたボリュームの隙間から明るさを取り入れることが可能となる。
街のリサーチから住宅の図式、形状を導くことで街に適した持続可能で楽しい住まいが建ち上がるのではないかと考える。

審査委員講評

実在する商店街、松江市伊勢宮町をどう生かすか、という提案です。
今、私たちが美しいと感じる歴史的町並みも、その昔にこのようなアイデアをたたき台に議論を重ね、生まれたのでしょうか。未来の伊勢宮町はどんな姿になっているか楽しみです。